

宮城大学 後援会報

Vol.39

発行
平成24年12月28日

発行者
〒981-3298
宮城県大和町学苑1-1
宮城大学後援会
TEL022(377)8381

編集
宮城大学後援会事務局

学生会執行部 キャンパス間交流構想

初回は球技大会 熱戦に沸く

「キャンパス間の交流を活発にさせよう」をスローガンに、今年の8月7日、大和キャンパス体育館で、学生会執行部主催のキャンパス間交流球技大会を開催しました。

交流についてはお互いに必要性を感じながら、正式にはなかなか実現されませんでした。そこで今年こそと両執行部が話し合い、球技大会を開催することになりました。

当日は総勢60人以上の学生が参加しました。太白キャンパスからの参加者は少なかつたのですが、キャンパスの隔たりなど全く感じられない活気に溢れた交流会となりました。

また、学長からのご支援により「学長杯」を設けることができ、表彰式は大いに盛り上がりました。

現在、第2回交流会の開催に向け準備を行っています。太白の学生の参加が少なかつたことなど、今回の反省を踏まえ、より多くの学生が参加する、持続可能な企画となるよう工夫していきたいと思えます。

また、今後はスポーツだけでなく学内外の活動においても交流を図れたらと考えています。たとえば食品に関するビジネスをプロデュースす



勝利チームには学長からトロフィーが



交流会に集った宮城大生=8月7日、大和体育館

るとき、食産業学部、看護学部の視点での考案と、事業構想学部のアプローチの知識を組み合わせるなど、それぞれのキャンパスの特性を生かせるようなことです。

今年の学祭では、初の試みとして、いくつかの露店や芸能発表が、互いのキャンパスへ出向きました。自分たちのキャンパスライフを活気に満ちた魅力あるものにするためには、こうした相互の協力が不可欠だと考えます。

学生会は自主事業だけでなくいろいろな場面で学生の活動を支え、両キャンパスの架け橋となるよう活動していきたいと思えます。そして私たち学生が宮城大の発展の一翼を担えたらと願っています。

(大和キャンパス学生会代表

事業構想学部2年 杉本健二)

宮城大学のグローバルバリゼーションの取り組み リアルアジア・リアルベトナム

宮城大学は、中国、アメリカ、オーストラリア、フィンランドに続き、今年五月、ベトナムのフエ農林大学、ハノイの国民経済大学と協定を結びました。

フエは、ベトナム中部にある古都で、かつての王朝の所在地であり、日本の京都に当たります。ベトナム戦争時代の米軍の最前線ダナン近くの世界遺産ホイアンから車で三時間弱のところであり、欧米からの観光客も多い街です。

最近の田中前文部科学大臣の大学設置認可騒動にも見られるように、飽和状態にある日本の大学は、少子化と相まって淘汰を余儀なくされております。平成26年に向けた大学再編の流れの中で、生き残り、道州制に向け地方分権が加速される時代に対応できる有為の人材をつくるためにも、宮城大学は「就活ゼロ、就職100%」と「グローバルバリエーション」を最重要の目標に掲げ、事業を推進しているところです。

国民の平均年齢27歳のベトナムは現在、経済成長が著しいASEAN諸国の中でも、その将来性が最も注目される国のひとつです。親日的で国民が勤勉であることでも知られています。宮城大学には食産業学部と事業構想学部併せて9人の留学生がおります。

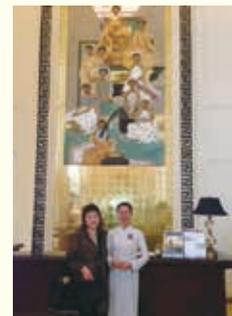
「リアルアジア」はそのベトナムの地で、同アジアに生きる人々の暮らし、経済産業、医療、行政等の現状を学ぶことにより「リアル」にベトナムを体験し、他国の文化や歴史に対する深い教養と、人生を切り開く芯の強い人間を育成しようとする、いわば「人間鍛錬道場」プロジェクトです。私も11月にホーチミン、ダナン、フエを訪れ、企業や大学関係者との打ち合わせを行いました。

このプロジェクトでは、事前に現地を調査するリサーチ隊(12月2日〜16日実施)、調査した場所で体験する本隊(2月)、そして現地の日系企業におけるインターンシップ研修隊(3月)、と三段階の研修を予定しております。真面目で礼儀正しいと評価されている本学の学生ですが、いささか引つ込み思案な性格が見受けられます。

ぜひ、御子女には、このプロジェクトに挑戦し、これからの長く険しい人生を自ら切り開き、ベトナムの代表花「ハス」のように花も実もある人生を送ってほしいと願っております。

REAL ASIA MYU(<http://realasiamyu.com/>)

(参事兼学務課長 成田美子)



協定校のある古都フエにて王家肖像画の前で

- 記事一覧
- 2面 ● 後援会役員と学生代表との意見交換会、「絆」
 - 3面 ● コラム、合同企業説明会、学生ボランティア
 - 4面 ● 大和キャンパス学祭、主催事業「講演会」
 - 5面 ● 太白キャンパス大学祭、シンポジウム
 - 6面 ● 「教員からの一言」、インターンシップ、終身会員制度のご案内、卒業式のご案内

後援会役員と学生代表との意見交換会

後援会では、学生への支援を充実させるために、役員と学生代表(学生会)との意見交換会を行っています。

今年11月8日に大和キャンパスで、11月16日に太白キャンパスでそれぞれ行われました。

両日とも、学生会から各委員会の活動状況が報告された後に、学生の要望や、後援会役員からの助言など、活発な意見交換が行われました。

大和キャンパスでは、新たな委員会活動であるガーデンキャンパスの学内緑化の取組や、初開催の太白キャンパスとの交流球技大会などについて報告がありました。また、大学祭を通じて地域の方々との交流を深めていきたいとの学生の発言には、役員から、市民センターなどで近隣住民の活動を情報収集し、積極的に連携を働きかけてはどうかとの助言がありました。

太白キャンパスでは、大学祭開催のホームページが作成出来なかったことについて、役員から、大和キャンパスの学生から協力をもらおうなど一層の交流を図るべきではないかとの意見がありました。また、委員会活動で人員が少なくなってきたという現状が話題となり、役員から、学生会全体で協力することも必要との助言がありました。その他に、大学祭実行委員会から備品購入の要望があり、具体的な内容を後援会へ提出してもらい検討することとしました。

今後も後援会では、意見交換会の場

とどまらず、様々な機会をとらえて学生の声に耳を傾け、学生が充実したキャンパスライフを送ることができるよう支援を行ってまいります。

(会計書記 鈴木大輔)



それぞれのキャンパスで行われた意見交換会
=11月8日、大和①・11月16日、太白



開催のあいさつをする沖野会長

絆

在校生、卒業生、教職員など、さまざまな立場で宮城大学に関わっている方から寄せられた思いでつなぐ「絆」。8回目の今回は、この7月まで学生会の会長を2期務めた成田康宏(事業構想学部事業計画学科3年)さんです。2年間の活動の集大成として、学生会の足跡をたどることを思いつきました。成田さんが活動を通して得た「出会い」をご紹介します。

歴史をつなぐ架け橋に

事業構想学部3年 成田 康宏

私は1年生の8月から3年生の今年7月まで、大和キャンパス学生会の会長を2期務めてきました。

学生会は、私たちが入学する数年前に解散しかけたことがあったと聞いていました。当時の先輩方の努力で何とか存続できましたが、学生会の活動を記した資料は紛失してしまったそうです。

私たちは開学当初のことを知る手がかりがほとんどないまま、学生会を運営してきました。悩むことも大変なこともたくさんありましたが、この2年間の活動はとてもしっかりあるものだったと思います。そんな中、ある思いが私の中で膨らむようになりました。それは「過去の会長・学生会のメンバーはどんな気持ちで活動を行っていたのだろうか?」というものです。それで、後輩に会長を引き継いだ今、宮城大学の学生会が歩んできた足跡をたどってみようと思いを立ちました。

とは言い、10歳も上の先輩となるとさすがに面識はありません。でも当時学生会に携わっていた人の名前を頼りに連絡先を調べ、思い切った面会を申し出てみることにしました。



執行部の歴史をつないだ皆さん
左から柴田さん(3期生)、照井さん(4期生)、佐久間さん(5期生)、成田さん(13期生、計画3年)、杉本さん(14期生、デザイン情報2年)、納富さん(15期生、デザイン情報1年)

最初に連絡したのは、市内の大学に勤務する4期生の先輩です。面会の申し出に快く応じてくださり、他にも数名の先輩に声をかけていたいただけることになりました。会合では話を聞くうちに、やはり開学当初の先輩たちの業績はすくなく大学の歴史を自分たちの手で」という熱意を感じました。

その後も宮城大学同窓会の運営に携わっている先輩が仕事の休みを利用して大学に来てくれるなど、これまでに10人ほどのOB・OGの方と会い、当時の学生会や大学の様子について貴重な話を聞くことができました。

また、学生会の話以外にも、社会人の目線でも今後のことについて助言を頂くこともありとても有意義な活動となりました。

今後は先輩方の話を資料にまとめ、学生会の歴史としてこれからの活動に役立ててもらいたいと考えています。また、この活動を通じて、現在進行

形で多くの先輩方とながりを持つことができている。今回の活動に留まらず、このつながりを活かしてOB・OGと在校生との架け橋となればと考えています。先輩たちの想いをうまく後輩たちに引き継いでいきたいです。

タマネギ畑のクリスマス

食産業学部教授 森山雅幸

毎年クリスマスが近づくと、いつもオレゴン州の東端にある農村・ベイルを思い出す。町の面積は、仙台市の約32倍、人口は約3%である。この町には、移民した日系一世が開拓した、美味しいジャガイモとタマネギの畑が広がっていた。

オレゴン大学で迎えた最初の冬季休暇、留学生寮が10日間閉鎖されたため、友人の家があるベイルで過ごすこととなった。大学のあるユージンからグレイハウンド・バスに揺られること3時間。砂漠のような荒野をひたすら走り小さな田舎町に辿り着いた。映画「バグダット・カフェ」に出てくるようなドライブインで降り、暗い夜道を歩いて訪れた「クワハラ家」では、日本からの珍客として温かいおもてなしを受けた。その夜、「エギゴハン(卵かけご飯)」「ボチャボチャ(お風呂に入る)」といった聞きなれないアメリカン・ジャパニーズを交えて、たのしい日本語会話が夜更けまで続いた。



オレゴン州ユージン近郊の農村景観



オレゴン州ベンドの高原リゾート・サンリバー

翌朝、ご主人が人通りの少ない町を案内してくれた。凍りついた道はツルツル滑り、冷蔵庫から吹いてくるような冷たい風が肌を刺すように痛く感じられた。午後は、作業用の軽トラックで畑を案内され、数百ヘクタールはある米国の大規模農業用地を見ながら、その年のタマネギの出来具合や農業の厳しさなどの話を聞いた。その日はクリスマス、夜は七面鳥をメイン・ディッシュに、ご自慢のタマネギやポテト料理がテーブル狭しと並べられた。デザートは、手作り饅頭とコーヒー。そして最後の仕上げは、「お茶漬け」だった。

その夜、日系二世の家族から受けた「遅く生きるバイタリティーと心温まる人情」は、何よりのプレゼントとしていまも心に強く残っている。

メリー・クリスマス！

(もりやま まさゆき)

1949年福岡県福岡市生まれ
2005年4月より宮城大学食産業学部教授
鹿児島大学大学院卒業後渡米。1980年オレゴン大学大学院卒業後米国の設計事務所勤務。1989年帰国し仙台で森山アソシエイツ設計事務所設立。



事業構想学部・食産業学部 合同企業説明会開催 有力企業44社が参加、会場に熱気

12月7日に大和キャンパス体育館で、例年を上回る有力企業44社を招き、事業構想学部、食産業学部合同の企業説明会を開催しました。両学部3年生及び研究科1年生の合計238人が参加し、活発な質疑応答が行われ会場は熱気に覆われました。

合同企業説明会に先立って行われたキックオフ・ミーティングでは、西垣学長より社会への旅立ちに際しての心構えやキャリア開発の考え方などについてのお話をいただきました。

参加した企業からは、本学の学生の明朗さ、真摯な姿勢などにつき高い評価をいただき、これまでも増して本学から積極的に採用していきたいというコメントも数多く聞かれました。

来年1月23日には、今年度第2回目の合同企業説明会を予定しており、今回とは異なる企業を中心に約46社にご参加いただける見込みです。教職員一同、全力でサポートして参りますので、引き続きご支援、ご協力をお願い申し上げます。

(キャリア開発センター長 田邊信之)



企業の説明に真剣に耳を傾ける学生

農と食で元気に —食産業学部学生ボランティア@グリーンの活躍—

食産業学部 ファームビジネス学科教授 森本素子

震災から1年たった今年の春、仮設住宅に入居されている被災者の方たちの自立支援のため、仙台市から委託を受けて見守り事業を行っている(社)パーソナルサポートセンターが中心になって「農業プロジェクト」が立ち上げられました。このプロジェクトでは農と食について専門的に学んできた食産業学部学生がその技術を生かした支援を行っており、ファームビジネス学科の1年生から3年生まで、約25人が「@グリーン」(アットグリーン)というボランティアグループを作り、交代で活動に加わっています。主な内容は、附属坪沼農場での農作業と太白キャンパス加工棟を利用した調理実習です。今年一番の成果は大

震災から1年たった今年の春、仮設住宅に入居されている被災者の方たちの自立支援のため、仙台市から委託を受けて見守り事業を行っている(社)パーソナルサポートセンターが中心になって「農業プロジェクト」が立ち上げられました。このプロジェクトでは農と食について専門的に学んできた食産業学部学生がその技術を生かした支援を行っており、ファームビジネス学科の1年生から3年生まで、約25人が「@グリーン」(アットグリーン)というボランティアグループを作り、交代で活動に加わっています。主な内容は、附属坪沼農場での農作業と太白キャンパス加工棟を利用した調理実習です。今年一番の成果は大

学祭での出店でしたが、坪沼でとれたかぼちゃを使ったクッキーを作り、学生と被災者の方が一緒に売って約300袋を売り切りました。売り上げは活動に参加した被災者の方に全額進呈されました。それ以外にも、調理実習としてソーセージ、みそ、パン、ジャム作りなども実施し、大変喜ばれています。

調理実習で使う農作物を栽培している坪沼

農場での農作業には、酷暑の中、炎天下の草取りなど過酷な作業もありました。しかし、だからこそやり遂げた達成感は大大きく、収穫したものを加工・調理し、みんなで一緒に食べる時の喜びもひとしおです。このプロジェクトを通して、学生同士同年代のつきあいだけでは得られない経験をし、学生も大きく成長しました。この活動はこれから下級生にも引き継いでいく予定です。今後の活動を見守っていただければと思います。



大学祭に出展。大きな成果を上げる



2012大和キャンパス大学祭—10月7・8日



メインステージに掲げた今年のテーマ“pieces”

3000人の
来場者で賑わう

ただきました。催し物では恒例のおばけ屋敷や雑貨を作る店などごとも好評でした。仲間とともに自分たちの大学祭が作れたと自負しています。

一方で反省点もたくさんありました。大学祭は学内だけでなく企業の方など

大和キャンパス大学祭実行委員長、佐藤慧介です。10月に行われた今年の大学祭は、本学学生だけでなく地域の方々を合わせて約3000人もの方にご来場いただきました。ありがとうございました。

部との交渉事も多く、実行委員だけでは力が及ばず、多くのトラブルを起こしてしまいました。その度に大学事務部の方、後援会の皆さま、先輩たちに力添えいただき、開催までこぎ着けることができたこと心から感謝しています。失敗で得た経験は今後にしっかりと活かしていきたいと思えます。

大学祭実行委員会は来年の学祭に向け「今年よりも良い学祭にしたい!」との意気込みで、すでに1年生中心の新体制がスタートしました。今後ともご支援をよろしくお願い致します。

(大和キャンパス大学祭実行委員長
デザイン情報学科2年 佐藤慧介)



「娘すずめ。」の華麗な舞



「美味しいよー!」



暗くなるまで賑わった特設ステージ前



Ms...Mr. ?



実行委員100人いたから、だ・い・じょ・う・ぶ...だった!!

会場を和ませた『前向き人生論』

後援会主催事業 フリーアナウンサー 生島ヒロシ氏講演会

毎年大学祭に合わせて開催する主催事業講演会が、10月7日大和キャンパス講堂で行われました。

講師はテレビやラジオでおなじみのフリーアナウンサー生島ヒロシさん。詰めかけた500人を超す聴衆が1時間の熱弁に耳を傾けました。

演題は「もしもに備えて一心と体と財布の健康」。

生島さんは気仙沼市出身で、今回の震災で親族や仲間を失うという悲しい経験をしました。震災直後から震災遺児への援助や地域の活性化のため先頭に立って活動したことなど自身の活動を紹介しながら、一日一日を大切に生きることや残された人間が頑張ることの大切さを語り掛けました。

「健康」の話では、毎朝ラジオ番組を通じ話題にしている健康秘話を披露。呼吸は吸う方が大切。口呼吸は万病の元。鼻呼吸で風邪がひきにくくなる。これから90歳以上生きる時代には、歯が大切であり、若いうちからの歯のケアが重要であるなど持論を述べました。

そして話は円高、低金利、デフレーションが続く最近の日本の経済・金、



大勢の人が詰めかけた会場=大和キャンパス講堂

融情勢に及び、国内だけに留まらず、世界に羽ばたくためには語学力を身に付けることが大切と説きました。東南アジアでは直接英語で仕事のやり取りをしているのに対し、日本人はまだ通訳を介して仕事をしていると指摘、国際競争力を高めるために英語力を身に付けることが重要と力説しました。

また、定年後の人生が長い時代だからこそ資金計画を考える必要があり、正しい知識を身に付け、世界のマーケット商品やリスクの分散を研究しながら投資をすることは、認知症の防止にもつながるとし、体で稼ぎ、頭で稼ぎ、お金にも稼いでもらうことが、財布の健康と締めくくりました。

「望みが高ければ退屈しない」

「未来志向に意識変化することで人間の可能性をみいだすことができる」などの生島さんの前向きな人生論に、



生島ヒロシ氏

2012太白キャンパス大学祭—10月13・14日

★**満員御礼!**
★**お笑いライブ**



メイン会場のシンボルマーク。スナップ写真を張り合わせた牛のモザイクアートは実行委員の力作です。

をお呼びし、お笑いライブを行いました。会場は満員御礼、大盛況でした。伝統のもちまきはもちろんの事、初めて企画した脱出ゲームも、出だしは心配しましたが、最終回では定員を超えるほどの盛況ぶりでした。不安だった来場者数も、今年は1500部用意していたパンフレットが一日目でほとんどなくなるほど多くの方に訪れていただき、本当に良かったです。

こんにちは、大学祭実行委員代表の小野寺啓介です。今年の大学祭は、「イー・ト愛ランド現象」食べ物たくさん、「ここ食産」をテーマに開催しました。たくさんの方々に来場いただき、無事成功と言えるものになりました。

委員長として大学祭を成功させることができるだろうか、不安な日々ではありましたが、活動の中で地域の方々との交流出来たり、学心ことも多く、本当にやってよかったと思います。来年はさらに、学部の特徴を生かし、幅広い年齢の方々に楽しんでいただけるようなものになればと願っています。大学祭開催まで協力いただいた方々、当日ご来場いただいた方々、本当にありがとうございました。



ゲストとパチリ! 記念の一枚。

(太白キャンパス大学祭実行委員長
フードビジネス学科2年 小野寺啓介)



たくさんの方に来場いただきました。



「静と動」催しものは盛りだくさん。

健康と復興まちづくりを考える シンポジウム開催

平成24年11月17日、西垣克学長をオーガナイザーとして「健康と福祉を考えるまちづくり」をテーマに、シンポジウムを宮城大大和キャンパスで開催いたしました。

この企画は、復興まちづくりの関係者が一堂に会し、今後の南三陸町をはじめとする東北の復興まちづくりについての議論や実際の復興事業につなげていきたいと考えての取り組みです。

午前は3つの分科会に分かれ「健康と生活を一体的に考える復興まちづくり」(企画:日本災害看護学会)、「復興まちづくりの展望、コミュニティ形成に向けた合意形成のあり方」(企画:復興まちづくり推進協議会)、「これからの心のケアのあり方を考える - 震災から1年半が経過した今、被災者の心のケアと課題-」(企画:日本精神保健看護学会)をテーマに、活発な意見交換が行われました。また、午後は、本学西垣学長より本シンポジウムの意義と継続的復興支援に関する決意表明がなされました。続いて大村慶一氏(元宮城大学副学長、元東北大学教授)が司会を行い、「地域に根ざした健康と復興のまちづくり」をテーマに鼎談が行われました。

最初に、佐藤仁氏(南三陸町長)から「南三陸町の復興に向けての取り組みの

現状と課題及び大学、研究機関に期待すること」室崎益輝氏(関西学院大学教授)から「これからの復興まちづくりにおいて私たちは何を考え、どう行動すればいいのか。子どもや高齢者が安心して暮らせる東北復興の姿、魅力ある地域の形」南裕子氏(高知県立大学学長)からは「復興のまちづくりにおいて、被災者に寄り添う看護の専門性。南三陸町をはじめ被災地に住む全ての住民が、健康で生き生きと生活するために」について講演を頂きました。

その後フロアの参加者の方々と活発な意見交換が行われました。フロアには、本学学生はもとより地域の住民の皆さまをはじめ、県内外から170人の参加者が集まり活発な意見交換が行われました。

(看護学部教授 佐々木久美子)



年齢に関係なく探究心を持つことの大切さをあらためて考えさせられました。「たいへんな時こそ命の根が深くな

る」生島さんは講演の最後を相田みつを氏の詩の一節で結びました。(理事 下山晴朗)

食産業学部3年生必修科目 実社会の体験生き生きと

食産業学部のインターンシップ報告会が9月28日に実施されました。宮城大学食産業学部では、インターンシップが必修科目の授業の一環として行われます。

今年度は、137人の3年生が主に夏休みの期間を利用して、インターンシップに参加しました。インターンシップを受け入れていただいた企業・自治体・研究所等は77団体になります。



(食産業学部学生委員会
産業実習部会部長
神宮宇寛)

報告会では、学科別の会場において、学生が1人5分間のプレゼンテーションを行いました。研修先の企業の特徴や社会人になるための心構え、就職活動に活かした点など、実社会での経験談を生きた生きと発表しました。

また、優秀な発表を行った学生を選抜し、太白キャンパス大学祭のミニオープンキャンパスの際に、一般の方々に向けてポスター発表を行いました。こちらも一般の方々が学生が来場してくださり、有意義な発表会となりました。

事業構想学部2年生を対象に 授業だけでは得がたい経験

事業構想学部「インターンシップ報告会及び意見交換会」が、11月14日、約1200人の学生・教職員、受け入れ先企業の方々の参加で開催されました。

震災の影響で、1年ぶりの開催となりましたが、多くの方々に参加いただきました。報告会では、5人の学生がインターンシップ参加学生を代表してプレゼンテーションを行いました。「成企業の方からは、「成



(事業構想学部インターンシップ
委員会 委員長 藤原正樹)

長した学生の姿を見ることが出来て、嬉しかった」との感想をいただきました。

事業構想学部のインターンシップは、2年生を対象としており、今年は67団体・機関のご協力を得て、計83人の学生がインターンシップに参加しました。参加した学生からは、「自分の進路に対して視野を広げる体験が出来た」などの感想が述べられ、大学の授業では得がたい経験が出来たと思います。他方、受け入れ先企業・団体の方からは、事前準備不足などのご指摘もあり、今後、インターンシップの充実を図っていききたいと思えます。

後援会終身会員制度のご案内

後援会では保護者の方々が、学生の卒業後も宮城大学を支援する終身会員制度を設けています。

卒業生の保護者の皆さまの希望によりご加入いただくものですが、これまで多くの方々に入会いただき、大学の精神的な支えとなっています。会員の方には年3回発行の後援会報及び後援会主催事業等の御案内を20年間送付致します。

大学間の生き残りをかけた競争が激化する中、自主自律の運営を目指す宮城大を、更なる充実した支援で、物心両面から支えてまいりたいと考えております。

今年度卒業を予定されている保護者の皆さまには、新年改めて御案内いたしますので、何卒、制度の趣旨を御理解いただき、多くの方に御賛同いただきますようお願い致します。
(後援会事務局)

あいだ

間の価値の再確認

事業構想学部デザイン情報学科教授 小澤 尚

物にあふれる時代にあり、更に新しい物を志向して励むことは、今まで役立った物を廃棄物として積み上げることにもなります。

物々しい時代に対して、そうした問題解決に、古びたものの価値の発見や再生も一つですが、物から間に意識を変換し、失われつつある様々な間、空間、時間、仲間との関わりも解決の糸口になるはずで

まずは、主体的にいろいろな間を発見し、その価値を知ることから始まります。何気なく見過ごしている日常の環境も、ささやかでも緑や花や水のある場を発見するなど、様々な場や歴史や人間の関わりを知ります。街の一つの風景もじっくり見れば、知恵や努力の積み重ねも見えてきます。

現場でのスケッチも、そうした間の発見の機会の一つです。風や音などを感じながら、空間と歴史の重なりを知り、暫しそこに居ることによって人との出会いも生まれ、小さな葉書サイズのスケッチ行為でも、更に次の進展につながります。

トライ・スケッチ！



仙台市梅田川

台風や豪雨が来ると、山や丘陵地が多い日本の河川は、急に水が集まり、急傾斜で流れも急になるから、水害を恐れ、深く掘って広げて高い土手が造られている。身近だった小川は遙か下でコンクリートで生き物も絶え、上は落下防止の柵がめぐらされ、中には、地下化で見えなくなっている所もある。しかし、探せば、水に命と浄化を願う運動や、わずかながら、親水の場所が見つかる。ほとんどないと思われている仙台の街中で探した。



三島桜川



オランダゴッダ

絵・小澤 尚

卒業式のご案内

平成24年度宮城大学卒業証書・学位記授与式を挙ります。教職員一同、ご家族の皆様と共に祝いしたいと存じます。どうぞご出席ください。式典の詳細は、1月中に大学ホームページに掲載します。
(URL: <http://www.myu.ac.jp/>)

なお、式場内の座席数は限られているため、満席となった場合は、式場外のモニターでご覧いただくこととなりますので、あしからずご了承ください。

■日時：平成25年3月19日(火) 午前10時～11時30分頃

■受付：午前9時開始

■場所：大和キャンパス講堂

宮城大学事務部学務課 ☎022(377)8218

編集後記

震災から1年9か月、被災地では復興に向け具体的な取り組みがなされた年でしたが、再生までの道程は遠く、大変な状況で過ごしている方がまだたくさんいらっしゃいます。こうした方々に対する「@グリーン」の活動は、新しいボランティアのスタイルとして大変意義のあることではないでしょうか。「できることから一歩一歩...」。息の長い活動となるよう見守って行きたいと思います。

皆さまどうぞ良いお年をお迎えください。

(S・I)